

の準備をしている、アケボノシユスラン、フデリンドウの越冬苗にも会え、私も冬ごもりの漬付けの事が頭をよぎった記憶がありました。というのは、これを書いているのが次の年の3月8日なんですものヒントもずれてますよね。加藤女史の、野幌の植物を苦多尼訶にのせないと、可愛想の一言にほだされてしまって、

とにかくフィールドに出るといつも新鮮な驚き

と発見があり何より楽しみにしています。

冬の間はスキーのリフトの上から、冬芽の観察で悦に入っています。又春が来て新しい植物に会えるのを楽しみに会に参加したいと思っています。

今朝、庭のバードテーブルにエゾリスが入っているのを感激しながら見て書きました。

(札幌藻岩山在中)

だから今年もまた

山 我 好 駄 辺

厳しさを極めた冬も、桃の節句のころから陽射しが強まる。積み上げた雪の壁に氷かんざしが育ち、野鳥もくぐもり鳴きをはじめ。

数十年前の飢餓の時代。子供だった私は、冬になると、とうきびを餌に虎挟みを仕掛けて野鳥を捕った。醤油だれをつけて焼いた寒のスズメは、「ちょんちょ焼き」と称して、ことのほか美味かった。カケスやヒヨドリがかかることもあった。捕獲も調理も自分で行うのだが、子供ながらに、毛をむしる時は鳥の目を見ないようにしたのを覚えている。

飽食の現在、かつてキリギリスだゴボウだと言われたのが嘘のような肥満体をもてあましながら、頬杖をついて庭の給餌台で一心に餌をついばむ野鳥を眺めて、キー坊、左介、ジュン、アカなどと名前をつけて喜んでいる。

雪が消えると、植物が芽吹き花開き一気に春本番へ向ってなだれ込む。北国の春を、雪解けがはじまって一ヶ月余りを前期とし、消えてからを後期として分けてみた。前期は植物の地下部が活動し、盛んに水分を吸い上げる時で後期は地上部の働きが盛んになって、樹木が殻を脱ぎ葉を広げる時期にあたる。地下部の働きがにぶるころになると、地上部が動きだす。人の思わくが届かないところで、自然の営みが続いているのだ。

これも子供のころの思い出だが、堅雪を渡ってイタヤカエデの樹液採りをしたことがある。幹に傷をつけて、しみ出る樹液を空き缶で集めて煮詰めると、生木の臭いが消えて甘いメープル・シロップができた。砂糖不足の時代のこと、子供にはたいへんなごちそうだった。

過日カナダの人から、コクのあるメープル・シロップをいただいた。ラベル、罫とも全く同じものが市販されているのを見つけて買い求めてみたが、味も色もずっと薄かった。開けてみたら中味が違うというのでは、今の政治のようで、甚だ面白くない。喰い物の恨みが残ったはなしである。

緑の季節が近い。つまらないことに目くじら立てるのはやめにして、頬杖ついた手を大きく振って山の空気を吸いに行こう。草を観、花に語りかけ、樹の声を聴く、こんな気障な言葉が、大ききは自然の中に身を置く時、何のてらいもなく呟くことができる。傲慢で身勝手な自分を、そっくり受け入れてもらえると感じる。人間同志のいがみ合いや葛藤の諸々が、そして死までもが、些細なことに思えたりする。「造化にしたがひ、造化にかへれ」誰の言葉だったか。造化の三神に感謝しながら、私は今年も山通いをすることだろう。

昭和62年3月10日